進修館NEWS

進修館の家具は唯一無二 だからこそ大切にしていきたい！

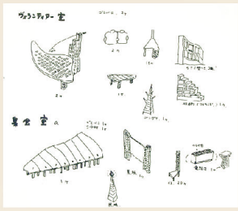
「ここの家具、とても個性的ですよね。」進修館を見学に来る方によく言われる言葉です。そう、進修館の家具は、進修館のために作られたオリジナルのものなのです。そしてそのデザインは、当時の宮代町の風景が取り入れられていたり、光のカケラが閉じ込められるようになっていたりと、工夫が凝らされています。

毎日たくさんの人が訪れるロビーには、大型のテーブルや様々なデザインのイスがありますが、よく見ると、背もたれや肘掛けのカーブなど、一つ一つ丁寧に仕上げたことがわかり、まさに「作品」であることが感じられます。また、イスに腰かけると、制作した職人の温かみを感じることができます。

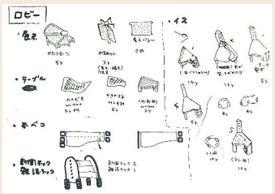
この家具たちは、進修館の建物と一緒に４０年以上の時間を過ごし、たくさんの会話や笑顔、時には涙を受け止めてくれていたのでしょう。だからこそ、これからも、もっとずっと大切に使い続けていきたいものです。

ブドウ柄のガラスがはめ込まれたテーブルはとても人気があります。カーブを描いているため、相席しても向かいの人と居心地のいい距離感が取れるから不思議です。

かつては公衆電話が置かれていた電話台の足の格子は、光のカケラを内側に閉じ込めるようにデザインされています。



１９８５年の広報みやしろの記事より。
進修館の家具は昔から愛されていたんですね。



象設計集団の樋口裕康氏による、進修館の家具のデザイン。
各部屋ごとにイメージを膨らませていたんですね。

2023年度「不惑のつどい」は大盛況でした！

「不惑のつどい」とは、町内在住・在勤、および、宮代町に縁のある４０歳のみなさんが交流を図る「２回目の成人式」です。２０２３年度の「不惑のつどい」は、１９８３（昭和５８）年４月２日～１９８４（昭和５９）年４月１日の間に生まれた方で、開催日の２０２４年３月９日（土）は、町内在住・在勤、および、宮代町に縁のある４０歳の方々が大勢あつまりました。

【４０歳が大集合！】

３月９日（土）、２０２３年度の「不惑のつどい」が開催されました。会場となった進修館大ホールには１００人近くの４０歳の方々が大集合。懐かしい顔ぶれに「ずいぶん変わったね～」「全然変わらないね～」「今は何をやってるの？」などの声が飛び交っていました。当日は、宮代出身じゃないけど現在は宮代在住ということで参加されている方もいらっしゃいました。懐かしい顔ではないけれど、同じ町内在住ということで顔見知りの相手に「えっ！○○さんって同い年だったんですね！」といった驚きの声があったりと、「顔見知り」から更に親睦が深まっていったような場面も見られました。

【会場は終始大盛りあがり！】

実行委員長の古山さんによる「乾杯！」の掛け声ともに「不惑のつどい」は開会、集合写真撮影、その後は歓談やゲームなどで盛り上がりました。予定では終わりの挨拶の後も集合写真の予定だったのですが、会が盛り上がりすぎて収集がつかなっくなったから？…かどうかはわかりませんが、型にはまった集合写真撮影はなしとなり、最後まで勢いに乗ったまま終了のときを迎えました。

【実行委員の皆さん、お疲れ様でした！】

ここまで会が盛り上がった裏には、実行委員の皆さんの頑張りがあります。進修館スタッフも事務局として何度か打ち合わせに参加させていただきましたが、準備の段階から皆さんすごい熱量で、見ているこちらもなんだかワクワクしていました。そして実際に開催されたときの、あの盛り上がり…このコーナーに寄稿していただいたことも含め、今回実行委員の皆さんとご一緒できて、本当に楽しかったです。

【2023年度「不惑のつどい」を終えて】

実行委員の方から、このようなコメントを頂きました。「不惑のつどい、同世代の触れ合いの場として今後も続いて欲しいです。」全く面識がなく、道ですれ違っている人であっても、同じ年齢ということで繋がることができる場所。遠く離れた所に住んでいても、かつて同じ時間を過ごした人と再び繋がることができる場所。２０２３年度の不惑のつどいを見ていると、そんな言葉がバッチリ当てはまるような気がしました。実行委員の方が上記コメントのような想いをもっていらしたから、このような会になったんだなぁ…と思いました。

最後は、実行委員長の古山さんのお言葉で締めたいと思います。皆さまご拝読ありがとうございました！

『４０歳も迷います。年齢に縛られず、
素顔でいられる宮代同級生を胸に、
元気がある日もない日も、
とにかく生きていきましょう！』

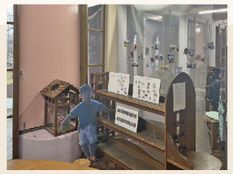
共催事業レポート「へそたんけん２０２４＠進修館」

進修館は「『世界の中心』のひとつ」というコンセプトで設計されています。「世界の中心」とは、世の中にたくさんある中心が交流する場所となってほしいという願いが込められています。この思いに呼応したアートに関わる表現者たちが、それぞれ大切にしていること(=へそ)を思いっきり表現するプロジェクト、それが「へそたんけん@進修館」です。昨年に引き続き２回目の開催となった今回は、３月１９日～３１日の１３日間にわたって進修館２階ロビー・コロネードでの展示、ワークショップ、パフォーマンスというラインナップでした。

テーマは「アートで進修館の家具の魅力を引き立たせること」。４組の表現者たちは、それぞれの持ち味を存分に活かした世界をつくりあげ、会場はいつもとは少し違う、でも居心地のいい空間になりました。

ロビーは、当時図書館がなかった宮代町で気軽に本に触れられる空間だったということから、そのイメージを再現しようというアイデアからスタートしました。

日本工業大学建築学科・勝木祐仁研究室は、進修館で撮影された写真から、一人ひとりが進修館で過ごした時間や記憶を映像や展示で表現する「進修館をアルバムにする」を展示・上映しました。



「人」という文字に見える木の枝をロビーやコロネードに展示した堤直人氏の作品は「人が集まるように」との設計時の願いが表現されているようでした。

サイアノグラム（日光写真）の手法で様々な人の大切なものを記録する浅見俊哉氏の作品は、万葉集のように長く時間をかけて編纂していきたいとの思いから、「万影集編纂計畫」と名付けられ、会期中の会場で制作ワークショップも行われました。

へそたんけん 2024

個人の蔵書をボックス型の本箱に収めた利根川兼一氏の「ｓ本箱」は、本のセレクトからその人柄が透けて見えようです。本を提供する人と会話しながら展示をすすめ、途中で入れ替えも行っていました。

ＤａｍａＤａｍＴａｌの「書架」は、自身が読み終えた本や開催した催しのフライヤーをシュレッダー処理したものを石のように加工した、まるで記憶の塊のような作品です。また、身体表現ワークショップも開催し、五感で進修館を楽しめる時間をつくっていました。

いずれの作品も、手に取って感じることもでき、春休みでロビーに集っていた子どもたちも楽しんでくれていました。また、作品展示と日常のロビー利用者が同居している様子も印象的でした。

今回参加した表現者のみなさんは「このプロジェクトは進修館だからこそ実現した」とおっしゃっています。それは、この建物自体が持っている包容力や高いデザイン性、また表現者と運営側が一緒に試行錯誤できる関係性があるからこそだと思われます。

ゆっくりじっくり育っていく「へそたんけん@進修館」。来年はどんな「へそ」を見せてくれるのでしょうか？